

短期大学の教育改善：Kyushu Great Teachers Seminar 2005 教員研修における一考

平田 孝治

(佐賀短期大学 暮らし環境学科)

(平成 18 年12月22日受理)

An educational improvement of a junior college: Participation in Kyushu Great Teachers Seminar 2005.

Koji HIRATA

(Department of Living Environment, Saga Junior College)

(Accepted December 22, 2006)

Abstract

The improvements of education and teacher's nature were discussed in Kyushu Great Teachers Seminar 2005. It had been understood in the seminar that teacher's educational concerns (the problems) are almost universal. It considered what a good teacher was for the purpose of the improvement in nature of a teacher. In conclusions from the group session, one conclusion led us as following. The teacher should keep pursuing the answer in modesty toward an ideal teacher who the teacher believes. It tries to watch the student with "Love" as a person first, and to feel what the student expects, and the individual small improvements that can be done by the class and guidance is executed. "Love" means to spend time for students, mentally and physically, to watch them and to give their needs. It voluntarily looks back on the class and guidance and to work for the improvements even the trifle things are necessary. Moreover, the real organization making that information and the opinion can be exchanged between teachers is important.

Key words : Great Teachers Seminar グレートティーチャーズセミナー
college education 短期大学教育

1. はじめに

平成 17 年 9 月 20-22 日（九州地区私立短期大学協会「短期大学将来構想に関する研修会」）Larry Fujinaka 教授²⁾を講師にむかえ Kyushu Great Teachers Seminar 2005 が開催された。日本では、教員の資質・能力及び指導力の向上にむけて様々な研修が行われているところであるが、今後国際高等教育等の国際的な考え方や諸外国短期大学での具体的教育改善法等を踏まえた FD 研修は益々必要となってくると考えられる。

本資料は、講師による講演内容及び資料と、討論でのコメント等は、セミナーから得た参加情報とその関連所思としてまとめた。本会開式においては、授業改善の本質は教材の活用等にはないという意味で、OHP（“能”がない）や PowerPoint（“力”がない）等の教材活用が皮肉られた。本会セッションでは、教師個人の資質を高めることを主な目的とし、「授業」や「学生支援」に関する改善点等が討論された。

（Kyushu Great Teachers Seminar 2005 の経緯）

Great Teachers Seminar は、アメリカ高等教育機関の FD 研修として 1968 年に始まり、以来アメリカ各地で毎年開催されている。日本では過去に沖縄、そして福岡（2004 年）にて開催された。

2. セミナーの内容

本セミナーには、17 大学（九州地区短期大学総 12 大学）から総員 37 名の参加があった³⁾。セッションでは 6 名程度の円形座のグループ方式を取り、個人の問題提起に始まり、対等な討議によって改善策を導き出す参加型ワークショップ形式（ストップ・アンド・ゴー・プレインストーミング方式）が取られた。講師は、セッション間の講演等を通じて討論を誘導した。グループにより討論内容が異なるため、参加したグループでの主な内容及びコメントを開催日程³⁾に沿って紹介する。

第 1 日目

講演

- ①グレートティーチャーズ運動の精神について⁴⁾
- ②GTS の成功に向けての留意点

GTS の成功とは、良き教師の本質を探ることである。（成功が指すものは、よき教師となる過程にある状態を意味している。）参加者は、肩書きは必要としないこと、誰も 100% の人はいないということ、自身を見つめ直すこと、直ぐに改善できることを探ることに留意しなければならない。本会の成功因子は、多様な意見が出されること、集産知識を出すこと、様々な意見を交換しあい、知恵を絞ること、そして少ない結

論事項を得ることであり、これらによって大きな成果が得られる。問題の改善方法は、必ずあるという姿勢を持つことである。

セッション 1

成功例を中心に討議し、下記の内容が挙げられた。

- ・キリスト教概論においては、生きてきた中で身近な人（周囲）に対して、何をしてもらったか、何をしたかを考えさせる。
- ・茶道文化を通じて国際文化交流を行う。
- ・幼児教育学科における子育て支援。
- ・情報リテラシーにおいては、コンビニエンスストアにおける客の出入り数などのフィールドワークから、身近な疑問を持たせた。コンピュータにおいては、分解させるなど日に見えるかたちで興味を引かせた。
- ・教育心理学においては、講義録を作成し、講義内容と実習内容との接点をもたせるよう心がけた。授業時は PowerPoint を使用し、イメージ化を心がけた。
- ・板書をノートに書かせた。
- ・テレビショッピングなどの話し方やイントネーションに学ぶところは大きい。（情報の流れが一方向ではある。）
- ・ノートの書き方（リメリア）を学習することは必要であろうこと

討議形式について

カナディアン・インディアン⁵⁾の古い習慣には、マジックサークルと呼ばれるコミュニケーションをとる方法がある。まず全員が円形に座り、一人ずつ相手の前に立ち目を観て握手と挨拶をしあう。（例えば 4 人いれば、各人は 6 回握手することになる。）上下なく、対等な立場になるために円形になり、この握手・挨拶（儀式）によって相手との距離を縮めることから始まった。本会のセッションは、セッション 5 を除いてこの形式で行われた。

セッション 2

独自の成功の手技・手法、教材活用例について討論し、下記の例が挙げられた。

- ・質問して 8 秒待つ
- ・あいさつ
- ・講義時に全く違う質問（概数を学ぶ）
- ・しつこく質問する
- ・ポイントを先ず板書する
- ・日常の経験談話を入れる
- ・顔・目を観て話す
- ・ダジャレを言う
- ・学生に授業させる

これらは教師の人柄や個性、独自の授業展開や状況等が反映されているものであるため、一概にこれらの例を単に授業に適用することは難しいと考えられる。

第2日目

講演

良き教師は良き人であり、良き人は「嫌う」ことに對抗する「愛」を知る人である。「愛」に流儀はない。「愛」が流儀である。

良き人が、信念を持って実行するなら、それは正しいことである。偏見をなくせば、他人や物事への理解が変わり、次第にそれ自体も改善に変わっていくことを理解する。授業改善において教師個人で今何ができるかを考えることが大切である。「愛」をもって学生に接することが大切である。「愛」とは、物理的にも精神的にも時間をかけてやることであり、そこに居てあげることであり、必要とするものを与えることである。教室（取り巻く社会も含め）には苛立ちや不安、緊張がみなぎっている。これらに対処するには、実践的教育や自尊心を与えること、学生を支える体制が必要である。

良き人は、一人で答えを求め得ることができ、また他人と一緒に答えを得ることができ、そして問題解決の行動をとることができる人である。二人以上いれば必ず衝突は起こるものである。衝突のハードルを乗り越え、皆で問題解決するための友好関係を作るとはとても大切である。

セッション3

学生指導の問題点とその改善法を中心に、セッション4に及んで議論し下記のコメントが挙がった。

(Part 1)

- ・学生間恋愛等の性的な事項・プライベートな面においては規則（ルール）を設ける。
- ・妊娠の問題においては、男性教師は女性教員に相談するよう指示、病院等の紹介に留める。
- ・関心を持ってもらいたい学生は様々な会話内容を使ってくる。「難しい」の言葉の裏には、「もう少し私が何をしているのか観ていてもらいたい」といった学習とは直接関係しない感情的な意味も含まれている場合がある。
- ・学校が奨める柱的な知識（授業科目）に関しては、学ぶ必要性をはっきり言い、強制的に受講させる。
- ・学生(学年)間のコミュニケーションにおいては、自主レベルの研究会活動やサークルなどの参加で養う。その導入は必要である。

セッション4

(Part 2)

- ・学生のモチベーションも大切だが、教員のモチベーションも大切である。いつも100%であるわけではない。これについては、学内教員間の会話が必要であり、その場を設ける必要がある。
- ・学生のモチベーションを高めることについて、押し売りしてはいないだろうか、学生の批判力も高めて

いきたい。

- ・最終的には個人では改善不可能な点が生じる。指導内容においては柱的な内容が必要（学生の学習だけでなく、態度や姿勢をきちんと指導する内容）となり、組織立ったサポート体制が必要となるだろう。本会で議論する点ではないが、大学全体の方向性について、構造的に改めていく必要に迫られている。私立短期大学では、近年の少子化に伴って4年制大学への改変が進められているなか、10年後以降には大きく変わる必要に迫られると考えられる（短期大学および4年制に改変した大学の存亡に関わる問題であろう）。一般に大学のイメージは一言で認知されてしまう。我々短大のカラーは何色だろうか。私立短大独自の柱（建学の精神など）が一番の特徴となる。これを具体的に学習・指導の面まで掘り下げていく必要がある。

セッション5

参加者全員から新任教員への、授業・指導に関わる一言アドバイスとして、下記のコメントを得た。

- ・本気でぶつかること
- ・何があっても笑顔でいること
- ・目的をはっきり持つこと
- ・柔軟な対応ができるようになること
- ・事務局と親しくすること
- ・学生のせいにはしないこと
- ・真剣にしかること
- ・「芯」をもつこと
- ・学生への対応は公平にすること
- ・良く寝ること
- ・経験ある教師に相談すること
- ・学生から学ぶこと
- ・学生を見捨てないこと
- ・本当の優しさで接すること
- ・間違いは悪いことではないこと
- ・プラスに考えること
- ・講義の準備だけではだめなこと
- ・自ら成長すること
- ・教育と研究を両立させること
- ・受け入れる気持ちをもつこと
- ・授業は制圧的に行うこと
- ・自分をいじめないこと
- ・弱みをみせることができるようになること
- ・ごまかさないこと
- ・学生ひとり一人をみてあげられるようになること
- ・話の練習をさせること
- ・勇気と思いやりをもつこと
- ・授業では10回は話すこと（必要事項は、くどいくらいに話すこと）

・授業のポイントをつくること（会話の中からキーワードを導くこと）
・学生の先を歩く（自身が勉強すること）、学生と共に歩く（学生を導くこと）、学生の後ろを歩く（自立した学生を見守ること）を教育の本質とすること
対面形式で実施されたこのセッションでは、発言が一方的になった。この形式はGTSの参加ルールに反するため、本来講師の意図するものではなかった。

セッション6

教師が問題とする下記の11項目が挙げられ、各項目をもとに自由参加型グループセッションが実施された。この11項目は、講師が25年間の教育研究活動のなかから、教師たちが如何なる問題を抱えているかを順位付けし集約した結果である。

教師共通の11の関心事項⁶

- 1 学生の授業への参加意欲
- 2 教育内容の量と学習指導
- 3 学生の授業内容の理解
- 4 学生の成績評価
- 5 教師の働きすぎ
- 6 低学力の学生への対応
- 7 学生の想像力・独創力
- 8 教師の教育への熱意低下
- 9 学生の自己学習能力の向上
- 10 教育を実践に結びつけること
- 11 学生のやる気の向上

第8番目の内容は、本会では経験(年数)等による教師の、教師としての過信も討議対象に挙がった。

このうち第6番目の「低学力の学生への対応」について得られた結論を記す。

- ・1年目の科目（再履修可能な科目）であれば、不合格にする。
- ・毎回のテストで自己評価させる。
- ・不可にし、再試時期を早くするなどして救済する。
- ・低いハードルに設定する。
- ・キーワード（用語）プリントを作成し、授業に使用する。
- ・授業中に「できる学生」にサポートしてもらう。（学生間の問題がある）
- ・学生自身に実力の自覚があるか。
- ・支援センター等の設置（補習）（先々は専門科目の選択単位にするなど）

この他に、組織的支援の必要性が挙げられた。少子化が進む近年は大学全入時代といわれ、低学力の学生への対応は増す傾向にある。これは、教師が改善できる領域を超える社会的問題でもある。そのため、組織立った改善策を講じる必要性もあることが挙げられた。

セッション7

良い教師とは何かという本会のまとめとなる問題から、下記の結論を得た。（グループ解答）

各教師が理想と信じる100%の教師像に向かって、謙虚に答えを求め続けることである。そこでは愛情を持って学生に接し、何を望んでいるのかを感じとることに努め、授業・指導でできる小さな1つ1つの改善事項を実行することである。授業・指導を自ら振り返り、改善努力をすることである。また情報や意見交換の場ができる組織作りをはたらきかけていきたい。

3. まとめ

1) 本セミナーに対する全体的な評価を述べる。

本会の内容の多くは、教師の資質向上に対するコメントとして理解し、個々の教育改善のための一つの指標を得ることができた。一方では、それらの内容は断片的な事項が多く、系統だった問題解決への道筋を見出すまでには至らなかった。講師が意図していたかどうか不明であるが、問題の提起と改善策への結論を得る過程（具体的方法）、いわゆるプロジェクト・サイクル・マネジメント手法⁷等の問題解決に向けた理論的展開はされなかった。そのため、授業の成功例や問題解決策、新任教員へのアドバイス等は、改善のキーワードとして多くの情報を得たが、授業改善等に十分活用され得るものとは言い難く、教師本人だけが使いこなせるノウハウであった。参加者はこの点を踏まえた上で建設的に独自の授業展開を創造することが大切であると考えた。

2) セミナーから得た所思を以下に記述する。

①第1点は、改善実行とサポート体制についてである。個人で直ぐできる改善点では、多くのアイデアや考え方のコメントを得、可能な改善を先ず実行することが必要であることを再認識した。そして自身の授業・指導が自己満足に終わっていないか、各学生が本当に欲していることは何かを考えさせられた。また各教師の抱える関心事は国際的（米国）に共通していることが分かった。教育・指導の改善に関しては学内あるいは各学科内で、日頃から気兼ねない意見交換ができる、開かれた場（教師をサポートする環境づくり）の必要性を感じた。

教育（学生指導を含む）方法は秘密の方法（魔法）であってはならない。改善実行された、その成功例や失敗例も今後の短期大学の教育改善のためのよい課題になると考える。本セミナーでは発言・意見交換を促すよう、心を解きほぐすような行為・説明が数多くあったことから、教師の資質向上にむけた話し合いにおいては、個人の内面的部分まで掘り下げ、意見を交換する必要があると理解した。教育・指導・評価の実際現場での一切の責

任は担当教師が担っているが、その責任のためか、教師が抱える諸問題に対して、特に人柄、職務に対する姿勢や誠実さ、資質や能力等に触れるような事柄に及ぶ懇談の場は通常ないのが現実である。これは、社会的に口に出してはならない事柄なのか、個人の資質や能力、取り組み、努力、悩みや苦しみ等は第三者から正しく評価・議論されない（得てして、単なる同情、配慮のない説教、陰口、軽んじ、嫌持て、疎隔、咎め、暴言、誹謗中傷、不適切な介入による負担増や押付けなどを受ける）からか、あるいは閉鎖的な、誰をも踏み入ることを許さない教師独自の世界に浸れるからかも知れない。教師も人であり、完璧な人柄をもって100%の資質と能力を発揮する人は誰もいない。教師の資質向上にむけた意見交換に先立ち、教師間の友好関係を築くことは不可欠であり、これをサポートする実質的な環境づくりは大切だと考える。

②次に資質向上の柱について述べる。教師側から教育現場を見た場合、私立短期大学ならではの「教育」「指導」「（教育ならびに専門分野の）研究」「建学の精神」の4つの柱があることを再認識した。教師は、大学の精神や学科方針等を踏まえた上で学生への教育・指導、そして教育研究を行っていかねばならない。また、教師の資質向上と教育内容の充実を図るためには専門分野の研究も改善努力の一つだと考える。

③最後に教育・指導方針（組織的基盤づくり）について述べる。個人で直ぐに解決・改善できる問題に限らず、教育や指導においては、短期大学の「建学の精神」、本学でいえば“あすなろう”の精神や“伝統”が中核となり、実際にこれが現場に反映されなければならず、短期大学全体の（世間一般にイメージされる）“カラー”は、まさにそこで培われるものと強く感じた。そのため、教師の個人的な改善努力ばかりではなく、教師が所属する組織のメンバー全員が正當に議論・評価し、（単に事務的關係を構築するのではなく）本質的な改善努力をすることも必要不可欠であると考え。

本資料が今後のFD研修等に少しでも役立てば幸いと思う。

注

1) Larry H.Fujinaka, PhD, Professor CC, Psychology, Social Science Division, Leeward Community College, University of Hawai'i.
Fujinaka 教授は、過去 25 年の教育研究経歴をもち、16 年間にわたり The Hawaii National Great Teachers Seminar に携わってこられた（2005 年時）。

2) 参加大学一覧

久留米信愛女学院短期大学・中村学園大学短期大学

部・沖縄キリスト教短期大学・福岡国際大学・福岡女子短期大学・別府大学短期大学部・広島大学（高等教育研究開発センター）・福岡工業大学短期大学部・香蘭女子短期大学・精華女子短期大学・佐賀短期大学・長崎短期大学・長崎女子短期大学・長崎国際大学・佐賀女子短期大学・九州大学・Leeward Community College

3) 研修会スケジュール

主な内容等	
第 1 日目	
講演	自己紹介等・GTS の成功に向けて（ルール説明）
セッション 1	授業での成功例
セッション 2	授業での効果的手技（成功例）
第 2 日目	
講演	良き教師とは
セッション 3	問題点とその改善策（Part 1）
セッション 4	問題点とその改善策（Part 2）
セッション 5	新任教員へのアドバイス
セッション 6	教師共通の関心事項とその改善策
第 3 日目	
セッション 7	まとめ

4) The Hawai'i National Great Teachers Seminar is a high energy summer retreat that brings teachers together to learn from each other and exchange teaching innovations and solutions to teaching problems. In spite of what the name might suggest, the seminar is not so much an assembly of “great teachers” as it is a group of dedicated educators in search of the “great teacher” within themselves. With no experts or keynote speakers, the seminar is based on the principle that teachers are the experts in teaching and learn best from one another. … (<http://www.greatteacher.hawaii.edu/Seminar.html> より抜粋)

5) PCM 読本編集委員会編，PCM手法の理論と活用，財）国際開発高等教育機構，228 pp（2001）。

6) 下記資料をセミナーの内容に沿って和訳されたものである。

11 Universal Concerns of Teachers (presented by Prof. Fujinaka, 2005)

1. Class Participation
2. (Un)covering Materials
3. Getting Through

4. Grades
5. Overwork
6. Under-prepared Students
7. Students' Lack of Creativity, Originality
8. Fear of Burnout
9. Poor Thinking, Poor Learning
10. Making it Real
11. Motivating Students